明治三十三年三月廿五日

女學雜誌

第五百八號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第五百八號目次

◎社說
御信任論

◎米國だより……櫻井鷗村
ハリス博士及其夫人
クリスチアン、サイエンス

◎講義
藝者美と素人美……青柳有美
城北村語……山下石翁

◎文藝
紫の舍歌話……紫苑山人

◎女學
兒童研究の片眼
女學に對して文部近日の訓令
戀愛教科書……有美

◎雜錄
海舟先生高話……關如來
鑛毒文學……田中正造

◎隨感
生死の羈絆○ささりの命(これを云へる文字に花の佳人)花の友、花の涙

◎寄書
ゆめの世……すゞ山

◎新刊書
西郷隆盛傳(菅井角

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾儕の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみを指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹冊定價	拾錢
	半年分定價	壹圓拾錢
	一年分定價	貳圓
	(内國無郵稅)	
	代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事○但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ甚だ不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候	
廣告料	一行(廿二字詰)一回	前金拾錢
	同 三回以上	一割引
	同 六回以上	二割引
送金	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられ度し郵便切手にて送らるる人は總べて一割增にて計算せられたし	

明治三十三年三月廿五日印刷
明治三十三年三月廿五日發行
發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
(電話番町十九番)

紫の舍公告

余さきに池袋清風大人に就きて敷島の道に入りそめしより、おぼつかなくも、たどり來りしと玆に數年、やゝ諸家の說を聞きつゝも、殊に香川翁の高見に推服する所あり。爾來步一步、ますます前途の杳茫さし、遼遠なるに驚きぬ。故にもとより敢て自ら得たる所ありしと云ふにあらず 然りと雖も、晩近人心のいよいよ浮華に流れて、誠實すくなく、詩人の虛名をてらいて放逸なるに驚ろかずんばあらず。是れ即ち有志者と同もに、詩美神の名に於て、慨すべきの至りにあらずや。故に玆に同好の士女諸子と共に一社を結び、相共に研讃して、斯道の機微を明らめ、あはせて詩美神の祭壇に跪きて、心より誠實の牲をさゝげんとを期す。是を以て、先進者には指導せられ、後進者とは共に相提携して、道に進まんとす。是れ本會の要旨なり。豈別に他意ありさせんや。

寄稿者は、左の條件を知了せられたし、

一 元と余暇を偷みて從事するものなるが故に返稿は事情の許す限りに於て速かなるべきと

二 佳作と認めしものは之を女學雜誌上に揭載して同好の人に割愛すべきと

三 返稿の爲に、相當の郵券を送附せられ度と但し前述せしが如き旨趣なる故に敢て期定の報酬を要せず、友誼の爲とては、賜るも可なり。賜わらざるも亦可なり。

東京駒込郵便區、巣鴨村庚申塚
紫の舍あるじ 湯谷紫苑

おもふさら袖ふりはへてむさしのゝむかしのゆかりいてて見ましや

女學雜誌

第五百八號

明治三十三年三月廿五日發兌

社説

御信任論

●人互ひに疑がふヿの太甚はだしき當節に於ては、結局、或るやんごとなき基礎に立つヿの外、頼るべきものはあらじと思ふと見へたり。

●就中、甞に憲政内閣をつくり、源平の若殿原、頓に昇殿を許されたる以來、宮中奥ふかき邊りの消息を始めて傳聞して、連りに『御信任』と云ふヿを申し觸らす樣になつた。

●伊藤侯爵の名望が俄かに高くなつたも、即はち此の機運に依ることで、侯は自分に於ても屢ば御信任厚きヿを吹聽せられ、世間に於ても大率ね之を認めて居る。

●然し、『御信任』の三字を頂だき廻る等は、甚はだ宜しからぬヿで、古しえ、忠義な心掛のある族は、斷じて左樣な不都合なヿを爲なかつた。爲れば、人も爪彈きして、其の不臣陋劣なる覺悟を蔑視するの風であつた。

●假りに、學校學塾ぐらい、人の集つた所ろで試して見ても直ぐ分る。上に立つ人の信任を得て居るなどと言つて、他に誇る書生に、氣慨あり眞實あるものは決して無い。又、十數名の下男下女を使つて見ても直きに分る、主人の御意に適つて居るなどと人にほのめかす輩に、忠實、責任を知るものは、殆んど絶無である。況んや、一天万乘の皇、四海一仁、博愛大悲なる國父に對し、吾ひとり衆に秀でたる御信任を辱くして居るなどと思ふ家來に、忠情に富だ人物の有ふ筈が無い。

●たとひ若し衷心に感激して、破格の御優遇に泣き、「吾を人と思し召してや、すめらぎの、玉の御聲のかゝるうれしさ」と吟じ、遙かに宮城を拜して、落涙合掌するほどの欣喜ありとも、之を心に秘めて、反つて人に恥ぢ、彌よ身を激勵して、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大旨に負かざらんとすることぞ、誠實なる人の胸中である　蜀の孔明が先帝の知遇を説き、正成が正行に對して遺言した時などは、又殊更の場合で、血涙を揮ひ、吾子もしくは吾子同様の御方に志を申したのである。なか／＼一汎多衆の人に對して、かろ／＼しい演説などをする態度ではない。

●然し、其の孔明ですらまだ我國人臣の手本とはならぬ。彼は三顧の知遇を受けて初めて玄德の臣となつた。其の臣とならぬうちは、まだ玄德の家來ではないのである，然るに、我國君臣の情誼は、無論、左様な關係ではない。知らるると知られざると、用いらるると、用いられざるとを問はず、凡そ日本の人民は皆な　陛下の臣民である。たゞに今日の國家組織から申す許りではない、古來の情誼、現在の威格から即はち左様に申すので、たとひ御信任を得やうが得まいが、吾等がお上に對して盡すべき情と義とに、些さかだに、變はりのあるべき筈はあるまい。

●吾等は、　今上皇帝に對して無二の心掛あるべきと同も、皇祖、皇宗、列聖列代の御家に對して、亦た同様の心掛あるものである。御家の爲め、即はち御國の爲には、忍び難き苦節を盡し、一代不忠の名を取るとも、尚且つ万代の大忠を盡すべき覺悟をしかと保たねばならぬ。左すれば、尚もつて現代皇帝の御信任を得る得ざるなどの一事をもつて、奉公の覺悟に厚薄があつては成らぬ。我々は一代の家來ではない、先祖代々、皇室の御家來で、即はち譜代永世の郎黨である。

●然るに、何んぞや、今の同胞、やゝともすれば、御信任の有無を論つろい、夫を以て頼みとし、夫なきを以て痛みとし、人に誇り、亦た羨やみ、之によつて以て盡瘁奉公の標準となすとは、如何にも君臣の情誼なき淺ましきとである。吾輩惟ふに、御信任ありとも思はれぬ時に、もしくは恐れ多きとながら吾不肖にして、即はち我に御信任欠けたりと思ふ時こそ、いよ／＼以て鞠躬盡力せねばならぬ、斯してこそ我等の心の眞とに休まる唯一の慰さめである。茲に戀愛の一事を例に舉げては異様に思ふ人もあらふが、其實、臣が君になづき、君に慕ひ、君に戀ふる眞情の極致は、一種高尚なる戀愛の特色であるから申すが、戀愛に於ては、他の信任を未だ得ざる時に於て尤とも熱情あるものである。其の信任を欠きたる時に於て殆んど絶頂に達するものである。殆んど狂せん許りの苦

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

哀苦節をもつて、陰に、裏に、夜に、暗に、人知れず、人知らず、熱愛熱誠を凝らすが即はち其の眞である。凡そ、吾等臣民が、 帝室に對する氣韻情操の中に、此言がたき優婉濃切の感格あることは、定めし讀者の心に同情あることゝ信ずる。

◉此を以て、吾輩が、今の『御信任』をかつぐ人々を見る時には、一種異様なる不快の念に切つて、甚はだ堪へがたく感ずる。之をこそ、不忠不臣と言はふか。情けなく、誠なき人と言わふか。輕薄、粗野、つゝしみなき人と言はふか。下郎根情と言はふか。追從、便佞の輩と言はふか。狐が虎の威を假り、猫が主人の膝の上で睨んで居ると言はふか。夫でも尙ほ一種、嫌やな感情を言ひ盡すことが出來ぬ。徹頭徹尾、嫌やで、きらひで、少こし惡くくて、嘔吐する計りに思ふのである。

◉伊藤侯などは、天成の善人で、稀なる才子である。民間、大方た之を罵詈したる十數年の昔しから、深く其の長所を認めて、紙上に公論したるの一事は、吾社の今に於ても尙ほ決して變へぬ所であるが、如何にも其の『御信任』を繰返す所ろが不快でならぬ。たとひ、之を繰返さぬ迄も、何となく、其心掛の現はれて居る所ろが不愉快でならぬのである。

◉然るに、今の民間の志士、其の多くは亦た此の嫌ふべき輕薄風に感染した。此風の毒は、イルフルエンザの如く、其人々の第一の弱點に滯ふりて、氣慨氣力の根本を根こぎにし、其の誠意誠忠の熱血を枯らすので、當代の流行のうち、此ほど、忌むべく、且つ毒するものは少ないかと思ふ。

◉既に、「御信任」をかつぐ樣になれば、是非、元勳、古老などをかつぐ樣になる。其のかつぐのは、心に誠意あつての所爲にあらず、たゞ速成の立身を求むるからの御神輿で、輕薄極まることである。既に、元勳、古老などをかつぐことゝなれば、青年革命の氣は老衰したので、最早や青年では無い。

◉抑そも、今の如く老衰し、今の如く萎靡したる一代の人心を救ふには、青年革命の氣慨より外にはない。又、此の如く末路末造となつたる舊弊の時勢は、年壯維新の大運動より外に救濟はない。左すれば、斯る時代に於ては、賴みにならぬものが、人に於ては二つある、即はち、元勳と、先輩とである。もし彼等が賴むべくば、コンナ時勢にはならぬので、彼等が時勢を導びくべき先見なく、手腕なくして、則はち此くなつたので、言はば彼等は最早や失敗したのである。決して

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

復たび彼等を頼みにしてはならぬ。彼等を頼みにするのは、今の時弊を長くするので、又亦今の時弊を繰返し、之を一層深くするのである。左れば、もしも今の時勢を不可なりとせば、此の時勢を來らせたことに責任ある、元勳、先輩をも亦不可なりとして、后輩、青年、自から經營の任に當らねばならぬことであらふ。苟くも、此の氣象降んなる時は、何をもつて、元勳や、先輩がほのめかす、其の「御信任」なるものに委頼する必要あらふや。

●彼等が之をほのめかすのは、實に卑怯千万なことである。彼等は既に失敗し、既に時勢に後れ、後進の英物に對して、何の優る所もないから、たゞ此の一物を掲げて、連りに、他の頭まを抑へんとする、喩へば芝居道でする三文上使が、動ともすれば、上意々々と言ふのと同じことである。實以て片腹痛いことで、之が何の尊敬する價値があらふ。

●然し乍ら、之はいつの世にもあるならひで、決して當節計りと思つてはならぬ。古えより、改革の士の妨たげをしたのは、此の連中で、たゞ君側にかくれ、ありもせぬ御信任を掲げて、自分の權勢を維持したのである。西郷先生が京都に於て、海舟先生が江戸に於て、當時少なからぬ苦しみを受けたのは即はち此の一事である。然し、先生方が之に無頓着で、叱咤號令し、遂に彼等を戰慄せしめ、彼等の腕と衣とを剝ぎ取つたる手段は、即はち亦た今日に於て倣ふべき一方で。當年の公卿が、大勳位侯爵とでも言ふべきほどに位高く、老中とか、若年寄とか、其名からして既に老衰萎靡し乍ら、只だ上樣が〳〵と言つて居た連中と同じものが、今の世にもある。此等に頓着するうちは、改革は出來ぬ。

●昔しから、よくある話しで。番頭や手代に主人の信任があるから、第一、其の氣に入つて、夫から叙ろにナドと思つて追從をして居ると、豈に計らんや、實際、信任はないので、奥へ入つて見れば、意外千万の事ばかりである。少し目のある主人は皆な、斯樣である。天に日月あり、一天万乘の聰明なる御方が、吾々さへ余り信せぬ人を信じ玉ふやうに思ふのは、無禮なことである。よし信じ玉ふとしても、夫は、何人をも信じ玉ふ御信任で、博愛大慈の致す所ろであらふ。況んやこれ、吾等の奉公鞠躬は、其邊の事には丸で無關係で、唯只々一意盡瘁せねばならぬのではない乎。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

亞米利加だより

米國事情

櫻井鷗村

鷗村、遊米視察の期滿ちて、近く歸朝す。見聞せる處の敎育、慈善、宗敎及社會等の事情、傳へて報すべきもの甚だ多しとなす。今より後、暫く『米國だより』の稿を續いて、讀者諸君の參考に供す。

●ハリス博士及其夫人　附ストーリ゛博士

予の桑港に上陸してより間も無く、本國にて條約改正實施せらるゝを祝賀せんが爲に、在留日本人等、一公會堂に一夜の盛會を催す、會場、演壇に列座したるものは、領事其他當夜の辯士と二外賓となり。二外賓とは、即ち一人をエム、シー、ハリス博士とし、他をイー、エス、ストーリ゛博士とす。蓋し此二者は、桑港に於ける日本人に取りての大切なる良友にして、多少思慮あるものは、皆この二友を尊敬せざるなし。

ハリス博士は、明治五年の頃、其夫人と共に、メソヂスト敎

會の宣敎師として、日本に來り、函館に在留して、一時、米國領事代理を攝したることあり。後東京に移り、宣敎並に敎育に從事し、今の青山學院の基礎を置きしが、今より十七年以前夫人の病を以て歸米し、博士は再び日本に來りしも、二三年にして歸米し、爾來桑港に在りて、渡米日本人の間に道を傳へ、また彼等の敎育を助け、或は公立學校の特に日本人より月謝を徴收せんとしたる際、また或は加州大學の日本人入學を拒絶したる際、また或は醜業婦上陸拒絶、救濟等の事件に當りて、日本領事と外人との間に立ち、日本人の味方となりて、斡旋到らざるなきと、爰に十四年、其間本邦人の桑港に來り、また他處より轉じて内地に入りて、修學したるものゝ多くは、博士の恩顧を蒙りたるものにして、氏のまた日本語に長ぜるは、大に其事業に益あり。また啻に桑港のみならず、北はポートランドより、南は、ロス、アンゼルスに到る太平洋岸と、布哇諸島とに移住する日本人の多數は、直接、間接に氏の德に預かれるものにして、蓋し、太平洋岸に散在せる、五千餘人の同胞の間に立ちて、最も健全にして、他の中堅となれる、團体は、即ち、博士を中心とせる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ものなり。而も博士は日本を以て第二の故郷となし、夫人の身躰だに許さんか、氏は、即ち日本に永住を欲するものなり。

一昨年春、博士は三ヶ月間我邦に歸省滯在せしが、其際、兼て其恩顧を受けたる者等、相計りてハリス會を組織して、博士を迎かへ、また永く其恩義を記臆せんが爲めに、爾後毎年一回會員の集會するとなせり。また我が天皇陛下は、特に博士の勳功を嘉みし、授くるに、勳四等瑞寶章を以てせられたり。

博士温厚熱摯、また事をなすに快活なり。人の益を計るに孜々として倦むとなく、無智なる日本人の時々、氏に向つて、世話の仕樣が不足なりなど、不平を吐くとあれども決して怒らず、善言を以て欺かるゝは、却て自家の徳となし、誹る者の爲にも、なほ一應の助力を與ふ、一身を日本人の爲に捧げて、五躰之に殉ふ、蓋し君子人といふべし。予の歸朝の途、再び途を桑港に取りて、博士に別を告ぐるや、博士、一書を贈りて曰く、

願くは君、予にたゞ一の慾望たゞ一の野心、即ち最後まで、我全力を以て日本の爲に致さんとするの意志あるとをば、日本に在る我友に告げよ。

と。博士の高義以て酌むべしとなす。此心あり、以て日本人間に立ち、忙々たる雜務を理して、殆ど寸暇なし。而して、また其一身を顧れば、夫人は十有七年の長きを病床に過ごしつゝ、彼地此地に轉養し、子孫また無く、昔横濱野毛山三尺の地下に哀々たる一女を葬りて以來、情を東風に寄せて斷腸するのみ。また同胞に不幸薄命の人あり、如斯にして而して博士何ぞ、常に快活なるを得るや、實に常人能くし難き處なりとす。されど博士今年五十四才の中老を以てして、頭髮既に灰白なるは、豈に胸中悶々の苦衷を洩すものに非ずや。

予一日ハリス夫人の病を、カレーヂパークのヂョーンス氏の家に訪ふて留まると三日、屢夫人と語りて、遂に拭ひ消すべからざるの感を得たり、清癯の病躰を床上に横たへて、時々、息を繼ぎながら、談話縱横なるは、一見余をして、故若松賤子女史在世の日を念起せしめ、從つてなつかしみの情あり、相接して舊知の如し。夫人は詩才に富み、日本に在りし日には、和學者里見某を師とし和文を學びて、竹取物語土佐日記の英譯あり、またイビー博士の編纂せし『クリサンセマム』及

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

『ジヤパンメール』に屢々日本和歌の英譯を載せたり。其他原作の詩編頗る多しとなす。

夫人も亦日本の良友を以て任じ、病床に在りながら、よく良人の事業を助け、日本書生を愛して、之を訓戒すると恰も慈母の如きものあり。思慮深く、神經鋭敏なるが故に、一念起るあれば之に熱中し、殆ど其身の病痾を忘るゝを常とす。哀むべし、夫人は十七年の長日月を生涯の中より奪ひ去られたるの感をなしつゝ、床上に苦吟して天命の至るを待ち、非凡の才藻と有爲の志望とを抱いて、遂ぐる能はざるは、豈に人生の恨事ならずや。冀ふらくは、夫人、靜に身を養ふて、宿痾少しく怠りなん日、我國に來り、山水の間に放遊して、冥々の薫化を、ゆたかに日本婦人に及ぼすとあらんことを。

ストーヂ博士も亦温厚の君子なり、曾て日本を見しことなくして、而して日本を愛し、十三餘年間桑港に在りて、日本人の友として、彼等を助けて倦まず、困苦に處して厭はず。もと醫師なり、宣教師として、シヤムに在りしが、健康を害ひたるが爲に、桑港に歸り留り、本業を捨てゝ、多くの自費を投じて今の事に任ず。素より博士の功績たるや、ハリス博士の如くに著しからざれども、陰に在りて事を成し、而して名の顯はれざるは、これ博士の長處なりとす、桑港日本人對外人の諸事件起りしや、ハリス博士を助けて、共に我同胞の味方となりて、大に其力を致したり。彼條約改正祝賀會の在りし日、ハリス博士、ストーヂ博士に戯れて曰く、今日は我等日本人の喜悦ぶべき日ならずやと。二人は共に日本を以て第二の故郷となして親愛の情いと切に、徳行共に高し、蓋し、日本人の目には兩博士は實に桑港の二美觀なりと稱すべし。

◎クリスチアン、サイエンス

米國は人稱して文明國と云ふ。されど他方より觀察すれば、甚だしき野蠻國なり。此國また稱して基督教國といふ。されど他方より見れば、異教國の最たるものなり。教育頗る普及せるは事實なり、されどたま無智蒙昧の習俗盛に行はる。一方に無神論者の如き道理一偏なるがあれば、他方には種々雜多の奇怪なる迷信あり。米國の宣教師等、多く日本を稱して迷信國といふ。されど予も彼等と等しき條件を以てすれば、米

國を稱して迷信の國と稱するとを得るなり。試みに彼の新聞紙を取りて其廣告欄内を見よ、手相、人相、吉凶判斷、日奇、などの案内あり。「東京の大道易者、英語を解して此國に來らば金儲け多かるべし、佐藤某の幹技術など可ならん」大道端に奇しげなる看板を出して、天體生物學など稱して、占やうの文句書きたる小冊子を賣れるものを見受けたるとあり。其他俗間の迷信甚少からず。米國は大國なり、大洋の河流の清濁を擇ばざるが如くに、雜多の現象雜物を包有して厭はず、これ即はち米國の米國たる所以にして、日本の如き小島國に、在り得べからざることなり。

以上いへる諸種の民間迷信の外に、幾多の迷信教即ち天理蓮門教の類を有す。凡そ日本の迷信教たる、種子を佛教もしくは神道に借るが如くに、米國の迷信教は、基督教を種として其說を立て、信者を集む。

クリスチアン、サイエンスの如きは、其迷信教の一なり。昨年九月カレーヂ、パークに於て、一夕ヂョーンス氏夫婦に伴はれて、隣人メーブリーの家族を訪ふ。此家は富める者にて、邸宅なかなかに美觀あり。主人は八十餘才の老病者とて、予等に面會せず。一人の息男、四人の娘等、老母と共に予等を歡迎す。其娘といふは、いづれも大學に學びたるものにして、末女は既にミス大學に在りといふ。母なる人も自から語りて、歷史の研究を好むといへり。然り此老母は耳既に聾して、管の助けを假りて談話するものなるが故に、對話頗る不自由なるに係はらず、しきりに予と談論せんとを致し、予の米國女子教育の精神を學ばんとするの意を知るや、即ち諄々と說いて曰く、己が一家は皆クリスチアン、サイエンスの信仰者にて、娘等皆高等教育を受けたるものなるが、この教の眞理なるを認めて、之を信仰するものなり。かゝる貴重なる教理は、之を日本に輸入するの必要ありと。蓋しクリスチアン、サイエンスとは、心外無別法の哲論の片かけに奇しき信仰を加味して、凡ての病は心より起る、心さへ治すれば、醫藥の助を假らずして万病即治すとの說なり。而して此教派にて傳道者と稱すべきものは、即ち醫藥を用ゐず、開祖エディ夫人の著書を誦し、唯心の教義をあびせかけて、人の病を治せんとするものなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

其說の迷惑せる、固より取るに足らず、或人之れを評して、基督教徒にもあらず、科學にも非らずといひしは、よく其の實を得たりと謂ひつべし。また米國諷刺小說家の泰斗マーク、ツウインは、昨年十月發行コズモポリタン雜誌紙上にて、大いに之を罵りたり。然るに不思議にも此の教の僅に三十餘年の間に、學藝の叢林たるボストンを本據として、國內に普及して、一種の勢力を有し、大會堂諸方に起れるは、流石に大國の米國なればなりと評するの外なし而もまた此教の開祖の一婦人たる事は、吾人の研究を値ひするものといふべし。

開祖は名をエデー夫人といふ。蓮門教の島村ミツよりも大なるものと覺し今なほ生存してボストンの本據に在り、信者の尊崇を受く。素より教育も乏しき者なるが、千八百六十六年『聖書に基ける科學と健康』と題する一書を著して、クリスチアン、サイエンスの一派を唱ふ。蓋し其人必ずや一種の信仰と、分けて迷信教唱導者に最も必要なる非常の意志を有せる一傑物なるべし。自から揚言して「神は十八世紀年間、科學的心念療病の絕對眞理の最後の發現を受得せしめんが爲に、予の備をなせり。』といひ、また其信徒は、新約全書默示錄第十二章第一節の

爰に大なる異象天に現はる、一人の婦あり、日を着、月を足の下にふみ、首に十二の星の冠を戴けり。

といへる、其一人の婦は、開祖エデー夫人にして、また其章第六節、

婦のがれて野に住けり、神其所にて……爲に備へ給へる一の所あり

とある其一の所はボストン府にして、また其書第十章第一節以下の、

我また一人の强き天使の雲を衣て、天より降るを見たり。虹その首に在り。其面は日の如く、其足は火の柱の如し、其手には小き書をとり……

とある其小き書は即ち此宗の寶典たる『聖書に基ける科學と健康』これなりといふ。而して此書の第一版は非常の拙惡文字にて迚も讀む能はざりしかば、徒弟之を訂正し、四度の改版をなして現版に及びしなりといふ。天授の書も、また時に訂正を要するものと見ゆ。

然りと雖もエデー夫人は非常の自信と堅固の意志とを有せるものならずんばあらず。然るが故に、威力信徒の上に加はり、時には不思議の功徳を奏し、以て一時頓に信徒を増加するなり。故にかゝる性質の宗教は、首唱者の死後、先人に劣らざる自信と意志とを有する後繼者なくんば、忽ち衰微を來さんや必せり。

抑も迷信教は、人間の最弱點なる疾病の機に投じ、强大なる意志を以て、之に臨みて、利を占め、勢を制するを旨とするものなれば、時に奇効を獲ることあり。クリスチアン、サイエンスの如き、またダウイー博士の信仰治療の如き、實にこれなり。病は人の最も憂ふる處なり。不治の病に罹りて最も甚だしとなす。故に少しにても道の出るべきあらば、之を求むるを人情の常とす。故に神佛は病の爲めに、最とも熱心に祈られ、病に益ありとの風説に、無稽の墓も、忽ち香花に埋めらる。甘露水は蓮門教を起し、四國八十八ヶ處は、癩病に實驗ありとの古來の傳説の爲めに、殆んど全國中の哀れむべき同病者を集むるに非らずや。凡そ人生に死と病との無きものとなりなんには、世界の宗教は、今の萬分一の勢力をも有せざるべく、殊に况んや迷信教淫祠の類は地を拂つて去るべし。

されど予は迷信教を以て、悉く非理笑ふべしとなすものに非ず。彼等はおの〳〵宇宙の眞理の幾分を發揮せざるはなし。然りと雖も、彼等は其唱導者信者の意志を以て、其眞理の影を、極端まで引き伸ばして自から己を欺きつゝ、何所々々迄も應用せんと固執するによりて、迷信となるものなり。クリスチアン、サイエンスの說く處の、心は病の源にして、また治療者なりとは、一の眞理なり、殊に神經性病者には少しく此教義を聽かしめて可かり。また信仰治療は、宗教信者の有すべき信念の一なり、又信仰なくば、醫藥も其効なき事多し。然るに二者共に、各其有せる眞理の片影を以て、四百四病内外科共に應用して、醫藥を以て魔道の具なりとするが爲に、人を迷に導く。吾人は寧ろ醫藥もまた神の賜なりと信じて用ゆるべきに非ずや。

心的にもせよ、信仰にもせよ、醫愈教の信徒は、不治病者と婦人病者とに多かるべしと信ず。婦人は迷信の念多しとの事の外に、彼等に特別なる病の性質によりて、醫藥を耻ぢて、

別法に救を求むるよりして、かゝる信仰に來る者尠からず。殊に米國婦人は、平素の敎育習慣に比例して、其病の醫療に苦しむと甚しからざるべからず。故に米國の婦人科手術は、獨逸日本に於けるよりも多少用捨注意する處ありといふ。また醫者にかゝるの煩と耻かしみとを避けて賣藥に頼るもの彼國にも多しと見えて『貴女よ汝の藥を求めよ』との廣告、中將湯同樣の廣告、新聞に多く見ゆ。これ等より推して彼國にも病ある婦人の迷信敎に訴へて、万一の治癒を希ふもの必ずや多きを察知すべきなり。

○遊臺即事二首

田村鶴村

臺北新竹間、到處衡茅蕭然、皆是前朝之民、彼豈無秋風思故國之感而止乎、余竊悲之。而有憶亡友荒尾東方齋之志作白雲吟。

白雲淡々首空回。絶叫鄭公安在哉。
少女何知亡國恨。荒村落日故樓臺。

二　思荒尾東方齋

涙滿鉄腸濃何油。不堪社稷百年憂。
丹心一片消磨盡。化作白雲繞帝州。

評論

藝者美と素人美

青柳有美

●ピクチユアスク美とビユウテ井フル美●

《藝者の人格を重んずべし》
《藝者は帝國の國粹なり》
《藝者美はピクチユアスク美なり》
《素人美はビユウテ井フル美なり》
《藝者美は飽かれ易し》
《職業美燈光おしろいヅキ等に助けらる》

鼻は一つ、耳は二つ。別に三つ目小僧にもあらず、口一つ眼二つなるに、如何なれば、今の君子淑女たちの仲間に、藝者といふものゝ、惡まれ輕せらるゝことよ。おのれはたゞ少し書冊の黄表紙覗きアルハベットの二つ三つも囀り得るまでの器量にて、亭主を尻にしくほどの腕達者ならば、素より頼もしけれど、尻に敷くは愚ろか、掌の上にのせることさへならず、萬事萬端夫の世話苦勞を增すのみにて、而こそ男どもの倫德攻擊もすさまじけれ、內所に廻れば、一人にても多くの氣に入られ、一ト言葉にても多く可愛ゆき御なさけに預らんも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のど、いやに哀れぽツく、デレ／＼とデレ粘ふに之れ忙しく、その四分の一ほどの技倆もなく、いづれも無能で生意氣で頑固で、何の取りどころもない者のみ多き爲に、藝者は人間外の動物にて、人と御間との相間で御座るとは、さても／＼虫の善過ぎる申状ならずや。今のクリスチャンといふ堅氣の婦たちよ、ちと嫉妬怨恨の矢鏃めて、世の藝者に就て學ばずや。如何に酒を殺り、宴席に侍り、及よしや肉を賣るほどの淺ましき擧動ありとて、藝者も遂に人の子なるを、降誕の日やあれも人の子樹ひろひし嗚呼藝者も遂に人の子なるを、かの日ナルヽの僞たかき者の裔を携へ來りて古聖者の足に塗り、紅涙をその上に注して之を己が頭髮にて拭ひし天が下いづくまでも、此の婦のなしヽことは必ず宣傳へらるべし」との有難き御語葉受けしは、町の中に淫婦の噂高かりしいたづら女なりけり。人みなは同じ佛性をうけし身なれば、そのうちなる人格を尊重畏敬する心なかるべからず。さるを今の世は、末世末法の時代とは申ながら、義人といふもの、仲間、前後の虹の如く、其處此處に多き故にか、一概に藝者を下げしめて之れに學ばんとするの志あるもののあるなし。淺ましとこそいふべけれ。

嗚呼、淫婦の香膏とその紅涙とに悦ばせ給へる古への聖者は、怪しき女人に其道心をとふけさせし醜業婦なりし耶。我れまことに／＼今の世の君子淑女に告げん、藝者は却りて爾曹より先に神の國に入るを得べしと。何故なれば、あゝ今の君子淑女よ、爾曹は藝者を待つに淑女とレヂィーとを以てするの心薄き乎。我れ彼れを重んずるに淑女を以てせず、その自ら下げすんで、身を亡ぼさんとする、亦宜なる哉。あゝ世の人よ何故に藝者の人格を重んぜざる乎。

日本とは、怪しきまで不思議にも特種の、藝術發達して、人の思ひつくことゞ容易ならざるほりとに、分業の行はるゝことといと細やかなる邦なりし。こは素より異國にはなきことなれども、嗚呼よ、藝道なるものありて、味覺の訓練發達に力め、また香を焚くの術ありて、よく嗅覺の練磨を效ゆるに非ずや。歐西諸國にありては、人の家の內室令孃たる者、よく宴席に侍樂の間に周旋して、恐る如き愛嬌を破るゝが如き笑顏とを八方に振りまき、嫣然玉を轉はす如き嬌音に、客人を倦ましむることなければ、かの土諸洲の內室令孃とは、是れ即ち內室令孃にして藝者を兼ぬる者なり。凡そ事物の進步は分業を

生じ、分業の、また事物の進歩を促すものたるは、生産社會其他百般技藝界の通則なりとす。然らば、かの西の邦々の如く内室令孃をして藝者を兼ねしめ、如何ぞよく接客歡待の道の大に進歩することあるを望むべけんや。これ猶ほ木匠をして鍛冶工の術を兼ねしめて、しかも其妙致に達せんとを望むの難きが如し。幸ひなる哉、我が日本は、この兩者の間に嚴正周密なる分業の法行はれて内室令孃は何處までも内室令孃として控へ、宴席に侍し其の間に周旋し衆客に樂しみを頒つ如きは、是れ全く藝者の職責たるなり。此の如くにして、藝者は衆客に樂と歡とを頒つを以て其專門の技藝となすが故に、容易に其術に練熟し、且つ其妙巧を極むるを得べきは理の當然たるものにして、かの歐米に於ける藝者兼業の内室令孃輩の、到底及ぶべき所にあらじ。さるを、怪しき道德家といふものゝ群り出でゝ、切りに發達せざる西の邦々の制度を羨み、我が邦の令孃内室をして、なほ且つこの歡待周旋の職責をも兼ねしめ、以て「藝者」の存在を絶對に否定せんとする如きは、これ分業は進歩を助くるものなりとの、産業社會第一の公理を無みするものにして、實に文明進歩の大賊なり

といふべけんか。又世には、藝者を以て詐欺騙の塊の如くいひなすものありと雖ども、必ずしも藝者の人を欺き騙ること多きの故に非ずして、分業の結果專心一意力めて斯の事に勵み遂によく練熟を極めて其巧致に達し、放に人を醉はしめて濶然たらしめ、以て歡樂を頒ち味はしむるの術に妙を得たりといふに過ぎざるのみ。是に於てか、我れ、世の藝者を卻くるに是れ急ならんとする人々の、心出れるを惡まざらんとするも豈に得んや。藝者は寧ろ是大日本帝國の國粹なるを。されど、世間また藝者の肉を鬻ぐを觀て、之を譏らんとするものあり、蓋し誤れるの見なり。人もし藝者を非議せんと欲せば宜敷く其本來の職性に就て之をなすべし、餘事の故を以てふ漫に其存在を絶たんとする如きは、論理の許さざる所なり。加るに之を又一方より觀察せんか、その肉を賣ることさへ、所謂内室令孃なる者の神聖を保持して、清淨潔白のものたらしめ、以て社會の秩序を維持するの効少々ならざるに於てをや。是に至れば、藝者は是れ世間の内室令孃をして其淑德を完ふせしめんがために自ら我が德を犧牲にせる獻身者なりといふを得べきなれ。又有難からずや。故に以爲らく、藝者は是れ帝國

の國粋也。と藝者は、かく其專門とする所の洵心術に練熟妙達するの好機あるのみならず、又其風貌のうちに、一種特得の美を發輝するが如し。我れは之を稱してピクチエアスク美即ち「怪美」といはん、かの内室令孃の美の如きは、是れをピユウテイフル美即ち「麗美」といふ、それ可ならんか。ウヰリヤム●ギルピン氏によれば、怪美を呈する物躰とは凡て凹凸多く、甚だ平滑ならざるものにして、麗美の物躰は、全く之に反し頗る滑かなものありて存すると。またウヰリヤム●ハミルトン氏及へイ氏によるも、凡そ怪美の物躰は、複雜にして變化著しくしかもその變化たるや急激にして、輪廓の如き概ね圓滿を欠くと。つらく かの藝者美なるものに就て觀察するに、多くは丸る顔ならずして、細る面長の傾きあり、且つや頰のほとりの肉稍々落ちて、顴骨其他に骨張りたるところ多く現はれ、圓やかに脂づきて肥え太れるが如きことなく、所謂滑かならずして凹凸あり、かの素人美の如く、フックリと肉づける簡單至極のものならずして、相貌のうち自ら複雜にして變化あること夥し、猶ほかの水に激し風雨に曝はるゝこと劇しきほとりの、奇巖怪石を出すこと多きが如きか。藝者は人世の激流に衝り、人情の風雨に曝されたるものなり。その肉落ち脂枯れて、所謂ピクチユアスクの美を呈するに至り、奇巖怪石に彷彿たるものありといふ亦宜ならずや。然るに、かの素人美の、しかく簡單にして複雜ならず、全面脂づきて圓滿に肥れあがり、甚だ滑らかなるものありて所謂ピユウテヰフル美を呈する所因は、かくの如く世の辛酸を甞むること深からざるの致すところなるべし。夫れ辛酸を甞め風雨を凌げりとは、勢力の非尋常なるを意味す。故に、藝者のピクチユアスク美には、一見慄然たらざるを得ざる悽味ありて、一種堂々の威風を備へ、之れに近づくものをして、自ら其下にたゝざるを得ざらしむるの慨あるなり、是に於てかユヸヰデール●プライス氏以爲らく、怪美と稱ふるピクチユアスク美は、俊美と秀美との間に位するものにして、「時間」はよく麗美のものを變へて、怪美のものたるを得せしむと。然り、藝者美のうちには、世の内室令孃輩の、到底企て及ぶべからざるサブライムの氣合ありて人をして仰ぎ嘆ぜしめずんば止まず。しかも是れ辛酸なる「時間の神」の賜物なり。コルシヤムは麗美なりしなり、群神宮も麗

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

美なりしなり。されど、数千年後の今は共に怪美なり。嗚呼世の羅馬希臘の都に是等古跡の跡弔らひ、耶馬溪にその風景の怪美なるを賞せんとする詩人よ、かの麗美なる令嬢美の、「人世」の風雨激流にうたれて、遂に我が藝者のピクチユアスク美に化れるの跡弔らひ賞せずや。

又翻て観察するに、素人美のうちにも、稍々このピクチユアスク美に屬するものと、純然たるビユウテヰフル美に屬するものとの二種類あるが如し。我れを以て視るに、東京に於ける所謂下タ町美人の特徴は、肉瘠せ脂枯れ、滑かに太れる所なきピクチユアスク美に傾けることにして、何れも悽愴の氣味を帶びざるはなく、之れに反し所謂山の手美人の特徴は、純然たるビユウテヰフル美あることにして、肉づき良く、脂濃きところあり、甚だ圓ろやかにして優麗なるも、その發情のうち、特に賞翫すべきの意味を宿すなし。而して下タ町と山の手との間に、かくも著しき徑庭ある所因の道また素よりこれあり。かの下タ町婦人なるものは、多くは、社會競爭の激甚なる間に立つを以て、特に世路の辛酸を味ふこと烈しからざるべからず。是に於てか、水流に激する岩石の如く、其美

はピクチユアスクの怪やしき姿とはなるなり。山の手の婦人に至りては、概ね深窓紅閨のうちに秘め養はれ、姫樣奥樣にて世波に觸るゝこと、至りて多からず、故に、よく性來の優麗を損はるゝこと少なく、自ら豐かに艶やかなるところありて滑かに圓ろやかなるビユウテヰフル美を呈するを得るなり。されば、素人及山の手美人の麗美は、甚だ自然にして餘韻なきものなれども、藝者及下タ町婦人の怪美は、頗る人爲的にして癖勝のものとこそいふべきなれ。

すでに癖勝のものなり、又悽愴にして怪異なり。故に、人を刺戟すること激甚ならざるべからず。すでに人を刺戟すること激甚なれば、また人の注意を惹き起さんとすると、至りて容易し。是に於てか、ピクチユアスク美を呈する藝者美は、萬人に認識せらるゝこと、甚だ容易なりといはざるべからず。これ世の令嬢美を認め得ざるものゝなほ忽ち藝者美の虜とするところとなりて、これに嘆美賞翫措く能はざる所因ならんか。されど、刺戟を與ふること激甚にして、快感を起さしむること容易なるものは、必ずやまた人心を疲勞せしめて、之に倦厭の情を起さしむること甚だ早し。これ實に心理の常則なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故に藝者の美は、面白くして趣味あり、之に眩して我が眼をおどろかすこと早しと雖ども、しかも其傍にあること長からば、幾千ならずして之を厭ふの心起り稍々苦感を覺ゆることあるに至るべし。個々かの藝者の美はしきに見されて、之を手活けの花とながめ、我が洒掃の勞を奉ぜしめんとする如きは、この段の消息に通曉せざる痴漢の計にして、思はざるの最も甚しきものなり。ピクチユアレスクの美は、稀れに之を觀てこそ快けれ、絶えず之を賞翫するに及んでは、遂に倦厭の思に驅られて、人心を疲勞せしむるものなるを。世の藝者に浮かれて之を我が内閨に引き入れんとする人よ、その心せよ。故にリンドセイ卿以爲らく、ピクチユアスク美を認識するは、甚だ易すけれども、須臾ならずして之れに倦くべく、ビユウテイフル美に至りては、之を認識すること稍々困難なれども、一たびその靈光に觸るゝや、快味長く消ゆることなく、容易に人心をして倦ざらしむと。是に於てか、素人美は、どこまでも素人に適して、永久に人の妻女たるもの、飾りとなり能くその夫の慰めたるを得べけれども、藝者の怪美はたゞ一夕一時の快を買わしむるに過ぎざるなれ。嗚呼、世の令嬢と内室なる

ものよ、稍々胸を平かにして安んぜよ。人の妻たる美は、到底藝者の持つ能はざるところなるを。故に又愼んで彼が美と技量とを承認し、それを敬し之に學び、そのうちなる人格を尊重し漫りに其存在を否定せんとするが如き無法あるべからず。藝者美のピクチユアスク美にして、長く快感を人に與ふること能はざるは、すでに述べたるが如しと雖ども、かの藝者の美が、往々、あしたに出でゝ夕べに消ゆる糸遊のはかなき泡の如くなるは、必ずしも、その怪美なるが故のみに非ずして、これに伴ふ二三の原因なくんばあらず。夫れ職業は神聖なるものなり。而して職業の神聖は、その執るところのことをして、凡て美はしからしむ。かの穢き肥料のそこ是處に散在するを見るに、素より快きものに非ざれども、もし農夫が己が職業のゆゑに之を取扱ふを見ば、先きの穢なさも、何處にか消えて、何となく心地よげに思はるゝものぞ。藝者の宴席に侍るは、其職業を執れるなり。なほ兵士の戰地に出で、說教師の壇上に立ち、俳優の舞臺に現はれたる時の如く、然に一種の氣稟を生じて、胸中自ら鬱勃たる英氣を宿し、相貌容色また共に職業の神聖に靈化せられ、陸離たる光

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

粉を發揮し、一段の美を添ふるに至るや、素よりなり。而して、人の藝者を觀る、多くはこの時に於てす。一見容色の美に打たれ、忽然として其の操縦するところとなる、また何ぞ怪むに足らんや。されど、職業の神聖より來れる美は、その職を執らざる時來らば、忽ちにして消えうすべし。これ藝者の美の、永く人をして快からしむこと能はざる所因の又一なり。

次に人の藝者を觀るや多くは夜に於てす。若し之を太陽の七色光線に曝さば、種々現れ來るべき汚點醜所の如きも、かの朦朧たる怪しき燈火の影に隱れて、容易に之を見出すこと能はざらしむ。こゝに於てか、さ程に美はしからざる容色も、何となく一種の美を浮生するに至りて、巧に世間の鈍眼をくらましむるを得べし。されど燈火の助けによりて得られたる美は、一たび日光の森嚴なる反射に遇へば、忽まちにしてその影を隱さゞるべからざるなり。これ藝者の美の、永く續くことあたはざる所因の又二なり。又藝者の皮膚は、長くこれを常用して、訓練を加へたるの餘、頗る白粉に「なづむ」ものとなり居ればか、もし世間の令孃內室をして之を塗らしめば、粉末多くは皮膚面にうき上りて、恰も總面に麥粉を撒りかけしが如くなるべきに、もし藝者をして之を用ひしめば白粉よくその顏に「のり」て、こゝに一種の美を人造するを得るなり。この事や、前二者と相待つところありて、いやが上にも其美を增すものなれども、おしろいによりて得られたる美は、之を洗ふとき又忽ちにして剝ぎ去られざるべからず。これ藝者美の早く消えゆき易き所因の又三なり。之を要するに藝者美は、しばしの眼を悅び樂ましむるによく、素人美は長く之を友とするによしとの意に外ならざれ。また知人に就て探ぐるところによれば、舞ひの練習と會話の巧妙との如きも、藝者美をなすに預りて力ある要素なりとか。今はたゞ十方世界の淑女たちに告ぐ、願くはその器量の十が二にも及ばざる如き不甲斐なき腕前へを以て、漫に藝者と其美とを譏るを止めよと。また世の藝者を翫賞せんとするものに告ぐ、願くは藝者を觀ること、なほ美術製作物を觀る如く、たゞこれによりて無關心の假感快情を起すにとゞめて、決して實感を伴はしむるが如きことあるべからずと。嗚呼、藝者は神聖なり、帝國の國粹なり。人よ、ともに其人格を重んじ、其職業を聖にせよ。我れは長久にこの賤めらるゝものゝ友となり、その怪美に嘆賞せん哉。

城北村語（一）

山下石翁

城北に隱士あり、隱れて出でず、獨り嘯ふき、獨り樂しむ。余、時に其の柴門を推して屡ば語れば、彼の愚は愚ならざる如く、彼の仙は仙ならざるが如し。惟ふに之を記して吾同人に見めすも亦一興なりと、自今時として此の題下に記すものは、皆な此の隱士の語なる耳。

◉「局面展開」の四字は、二個の時勢を表詮するものである。一つは、人心の倦んだる事。二つは、政治家先生達の無策で、究し切つて居る事。苟くも策あるものならば、ソンナ馬鹿なとは言はぬ。無策であるから、展開々々と言ふので、戸をあけてくれ〳〵と頼むのと同じヿである。たとひ無策にしても、幾喩ならば、自から押し破つて開けるのである。

◉苟くも總務委員などゝ云つてる族が、連りに大臣の椅子の分前を要求する。而も之が政見が同じだと言ふ黨派の中であるから、彌よ可笑なヿである。政見が同じならば、自分達が大臣にならなくとも可ではないか。他をして行はしめて、自分達は少しでも閒暇な方に居るのが結構なので、他日の用意と云ふものも、夫でこそ出來るのである。是非、己が大臣にならねばならぬなどゝ言ふのは、反對の意見の人が局に當て、國政が不都合であるとでも思ふ時に言ふべきである。今の政論は、丸でアベコベで、而も聞く人まで之を奇しまぬと云ふ、隨分馬鹿氣たヿだ。

◉國士たるものゝ恥辱は、先憂後樂の出來ぬヿである。先憂後樂とは、たゞ道德上の心得を言ふ斗りでない、智慧と見識との事である。機に先だつて憂ひ、早く其の準備計畫を爲すが、先憂である。衆に後れて安んじ、十分の用心堅固で、十二分の後始末を遂げるが、後樂である。夫故、國家に善政なく、國民に塗炭の苦あるは、皆な自分の責で、必竟、自分の智慧見識が足りなかつた故であると覺るのが、即はち國士たるものゝ胸中である。今の樣にお互ひに責めて、お互ひに任ずる所の無いのは、丸で車夫馬丁の喧嘩と同じヿである。昔し、孟子は人を殺すのを嗜まざるもの王たらんと言つたが、今は、自からの失策として悔悟自任するものがあれば、衆望は水の流るゝ如く之に歸するのである。

◉理は死物で、勢は活物であるから、道理も、勢に乘ぜざれば、生命も、光彩もないものである。人物の價値も必竟は此の譯合で、時の勢に乘ると乘らぬとによつて其價格が定まる。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

人物は遂には物價の高低と同じ筋道によるのである。夫故、人が俄かに馬鹿に見へるやうになるのは、別段、急に馬鹿になつたのではないが、勢が變つたので、即はち時勢に後れたのである。時勢に後れゝば、言ふとも、爲るとも、馬鹿に見へるものである。但し、笑はずんば道とするに足らずと云ふ程の格で、其人の言行が、いつも／＼破格で、いつも／＼時節と違つて居るが、扨て老もせず忘れられもせず、着々成功して行くと云ふやうであれば、之は非凡の人で、常人ではない。然し、先づなみ／＼の名士花役者の例を以て言へば、先年迄、隨分、エラソウに見へたものが、近頃、急に馬鹿氣て見へるやうになつたとすれば、即はち時勢が變つた證據であると見てよろしい。氣の毒ではあるが、彼等は時勢の風見で、別に達眼を存して之を睨んで居る人の爲めに風向きを見すの具となるものである。

◉今の時勢難は、一言にして盡きるので、即はち、財政困難が大原因である。然し、財政は、困難でなければ改革は出來ぬ。即はち、究して後ち初めて通ずるのである。サスレバ、財政の困難になつたのは、悲しむべきであるが、既に困難になつたる今日に方ては、最早、悲しむに及ばぬ、之で改革が出來るのである。然し、其の困難に際して、其の人があれば、改革が出來、人がなければ固より出來ぬ。興亡の機は之によつて分れるので、古往今來、別段、不思議は無い。今や、財政困難は、其の七八分まで達して居る、まだ色々の繰くりがつく間だが宜しくないので、更に究して初めて途が開けかゝるが、扨て其の途を開くべき人の有ると無とによつて、第二維新の運命が極るのである。左すれば、今の時は、志士の沮喪すべき時であるまい、大に奮發すべき時ではない乎。

◉日露戰爭の風評が連りに行はれる相なが、之は馬鹿げた樣で余り馬鹿氣て居ない、西洋人がよく日本を見ての評判である。無論、治亂和戰は、今日といつて、明日は分らぬもので、國家と云ふ一男子が、外に出て濶歩するに、いつ何時、ドンナ敵に會つて、ドンナ事を爲るに至るか、夫は固より分らぬことである。然し、只連りに魯士亞と戰かふやうに斗り流言されるのは、抑／＼故あるとで、吾々も少しは心配するのである。夫は、魯士亞から戰を挑むのではない、魯士亞は專制政治で、人物の意見がよく行われるから、中々、ソンナ馬鹿

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

な事は爲まい。魯士亞が何の爲に日本と戰かふか、譯の分らぬことで、ソンナ馬鹿なことを爲てくれるやうならば、寧ろ安心であるが、彼はなかなかソンナ淺墓なことをせぬ。第一、戰かつて何の益になる乎。日本と云ふ國は、之と戰かふのに、極く不利益な國で、之に勝つて見た所ろが、大した益はない。其益は必らずしも戰かはなくとも得られるのである。夫故、魯士亞の方に戰意はないが、其の戰意あるらしく誤解して、コチラから戰かはんとあせるのが即はち日本人の僻である。夫位の氣込がなければ、勇氣が無いとか、愛國心がないとか思はれ樣かと掛念し、則はちいよいよ強くなるのが、日本の所云ゆる勇士である。夫故、日魯戰爭は、西洋人が開かせるのでない、日本人が開くので、日本人中の志士、愛國者が開かせるのである。夫で、日魯戰爭になつたとして見れば、其の結果は何である。即はち、支那分割が之が爲に行はれるのである。日本は、義侠心によつて朝鮮の獨立を扶殖せんが爲に戰かひ、之によつて朝鮮を痛め、支那を弱くしたが、此次は支那保全の爲に魯士亞と戰かつて、而して支那の分割を早めるのである。夫故、吾々が日魯戰爭を恐れるのは、魯士亞に對して恐れるのでない、日本から之を起しはすまいかと恐れて居るのである。

◉今の政治家の理想は、只だ大臣になるに在りと云ふ。西郷先生や、大久保甲東が、薩摩から出て來て、御老中になりたがると同じことであるが、夫で政治が善くなると云ふ見込のあるとか知らんテ。又、官邊にある人でも同じことで、海舟先生が只だ御老中になりたがつて居ては、あの仕事は出來ぬ。凡そ、私利私慾の心なき以上は、大臣などになるのは、損で、苦しくて、何の功もないことだ。仕事は、ソンナものにならぬ方が善く出來るのである。

◉幕府の末も、ツマリは此の通りであつた。彦九郎の慷慨や、林子平の外交談や、頼山陽の新聞論說もあつたが、結局、ペルリが來たことと、外國公使の迫つたことで、漸やく内部の改革が出來たのである。内部は財政困難、外部は外交難、國内は黨派の區々たる議論ばかり。それで自から勢ほひが移つて、遂に維新の改革となるのである。

◉維新の改革となつても、明治三四年迄は、まだまだ再たび德川の政治に復ることと思つて居たものが多かつた。況してや、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

丁卯、戊辰の交などは、何が何やら分らないで、海道を上る官軍すら、決してそふ無雑作なことゝは思はなかつたのである。然るに、時勢と云ふものは、驚ろくべきもので、あの如く迅速に一變して仕舞つた。夫故、方今の究境に臨み、前途の暗澹たることに迷ふ人々も、卅三四年前の事を回顧して見れば、容易に合點することが出來る。

◉兎に角、悲しひ事には、日本の物産の少ないことで、迚も世界の人の目を引き、足を留めることが出來ぬ。向ふがしの支那などに比べて見れば、大厦高樓の前の小ツポケナ藁小屋の如きものである。然し、此の小さいものすら未だ十分に手が屆いては居らぬ。開拓、興業の余地が綽々として多くある。山林は丸で荒れて居る。水は殆んど放たらかしてある。方今大丈夫大いに志を立つべきは、實に殖産興業である。

◉之から非常に盛んになることは、西洋人のエゼント(代理者)となつて、外國品を賣ることであらふ。固より自然の勢ほいであるが、夫にしても外國貿易の規摸も小さなことである。どうか、エゼントとなつた以上、朝鮮、支那、南洋位迄を得意とするエゼントになる樣にしたいものである。

文藝

紫の舎歌話

紫苑

◉和歌は如何にして詠むべきか

余は前回より、事情に支へられて、心ならずも本欄を缺くこと數回、篤志なる讀者に對して、甚だ申し譯なき次第なり。さて前回に於いて余は歌てふものは、天下何人たりとも、よく詠み得べきものなることを語りぬ。されど多少、否大いに其の心得なきを得ざるなり。さらば如何にして之を詠むべきか、どういふ風によまば、則はちよきものか、請ふこれを語らん。

◉想を先きにし、詞を後にすべし

歌をよまんとする者、先づおもへらく、何だか『らん』だとか、『こそ』とかの如き、歌めいたる詞がなくては、詠むべからぬもの、又歌らしくなきものなりと。故にチヤンと姿勢の整ひて、前後より見ても恥かしからぬ樣にならなくては、と遠

慮する者、すくなしとせず。是れ大いなる誤解なり。
そもそも歌の姿勢をよく整へんとは、なかなか困難なるわざなれば、われら初學にしては、とても最初より、此のごとき考にて取り掛る可らず。是は全く修行のつみて而して後の談なりとす。

又最初よりして、上手によまんとおもふは、殊勝らしくあれども、實は是れぞ學問の道のためには、根本的誤解なりける。雙びの丘の法師が、

能をつかんとする人、よくせざらんほどは憖ひに人に知られじ。内々よく習ひ得て、さし出でたらんこそ、いと心にくからめど、常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひうることなし。いまだ堅固、片帆なるより、上手の中にまじりて、譏りわらはるゝにも恥ぢず、つれなくすぎて、たしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、妄りにせずして、年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、つひに上手の位にいたり、徳たけたる人にゆるされて、雙なき名を得ることなり。天下のものゝ上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、無下の瑕瑾もありき。されどもその人道の掟たゞしく、これを重くして、放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはる可らず。

と言ひけんやうに、なに人に笑はれても、何かあらん、その意氣にて、十分奮發せずんば、ダメなり。

故に最初より、詞のことには頓著なく、先づ思想、主意を第一とすべし。たとひ歌らしくならずとも、遠慮すべからず。構はずに面白き主意をとり、之れを後に言葉に直してよむべし。最初より言葉を奇麗にせんとし、姿勢を整へんとせば、いたづらに勞して功なきのみならず、却つて害あり。

故にくだらぬ歌の書物をひもときて、こゝに面白き五文字あり、かしこに七文字あり、とて之れをどうか旨く取り合せんと、料理のこんだてを見るが如くにし、果はその言葉に束縛られて、主意は何處にか失せゆきて、幽靈のごとくになりはて、木に竹をつぎしが如くに見え、且つは舟にて山に登るが如き、矛盾したる結果を來すこと、あへて珍しとせず。

されば、よしや俗語たりとも、或ひは漢語たりとも、出來うべき限りに一首の歌をまとめて、よみ出だすべし。此の方が進歩速かにして、又自然の發達をなすものなり。しかのみな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らず、詩人銘々の得意の進化をなすべきなり。社中は作爲的人工的、お世辭的、京の御茶漬的なるを最も忌み嫌ふものなり。至誠、眞摯、肺肝より涌きいづるものを最も貴重、歡迎するものなり。誠意、正心ならずんば、王公、貴紳の作たりとも、塵塚に投げすてんのみ。

されば同志諸君は、右の心得にてゆめ〳〵言葉などに屈托して、進歩の道を踏みまよふことある可らず。段々よみもてゆけば、其内になほされて、詞もよくなりゆくものなり。

例によりて、折におくれたれども、一二を示さん。

新年

あしたづの千代よぶ聲に明そめてのどかににをふ初日の出哉

あら玉の年のはじめののどけさに神代のさまを思ひこそせれ

初春

きのふけふ吹く風ぬるくなり初てハづくの里も梅にをひつゝ

歳暮

學ぶべきわざは様々つもれるを今年も明日にくれんとすらん

事なくて今年も明日にくる丶かなおもへば深し神のめぐみは

寒草

草はみな力なけにも折れふして霜の花のみさかりなりけり

山家鶯

夕けぶりかすむ山べの梅が枝にきのふもけふも鶯のなく

雨後立春

一雨に冬のさかひやとけぬらんぬるくも吹けるけふの春風

折にふれて

夕つく日ふじの高根にかたぶきて名殘の雲の色ぞにをへる

海邊霞

沖にうかぶ御軍船のかげきえて霞はてたる横須賀の浦

打よする波の音さへしづまりてはる〳〵霞む春の海原

きよみがた波もしづかに打よせてのどかに匂ふ春がすみ哉

志士凄涼間處老、
名花零落雨中看。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

兒童研究の片眼

兒童研究と云ふ事、我國にも亦た流行し來れり。此の流行は善且つ益ある流行なれば、其の益々普ねからんとは深く吾人の希望する所なれども、只此上の願ひと云ふは、其の研究の眼の眇ならずして、兩々たる活眼に竝んで同もに吟味せんと即はち是れなり。

如何なれば、今の研究者を眇と云ふかと問ふに、必らずしも其の觀察の粗漏なるヿを訓るにはあらず、まして特更なる偏視眼なりと云ふにもあらねど、今の研究者の殆んど全たく男性に限られて、女性の之に注視するヿ殆んど稀なるによりて若か言ふなり。否な、注視せざるにはあらざるべきか、其の注視々察して思ひ得たるヿの世に公けにせらるゝ皆無なる所以を惜しむなり。

蓋し、兒童の上に於ける女性の觀察力は、一種獨得の天禀にして、所詮、男性の及ばざる所ろなり。男性は動ともすれば、物數奇の心掛にて之に臨まんとすれど、女性は自からなる母德をもて之に對せんとす。夫れ、愛は極微の發見者なり、愛あれば、愛なき人の決して見出しがたき秘密をも發見す。兒童の性狀、氣質、嗜好、變化などにつきて、思ひ淺き族の雲煙過眼視し去るべき現象に對し、一々直覺して其の秘義を辨識するの能力は、唯だ愛あり母德ある婦人に於て存す。

左れば、兒童研究には、是非とも、女性の觀察を第一とするとなるに、今の我國に於ては、尙は此事行れず、行れざるのみならず、其必要を說くものも少なく、之を重んぜんとするもの稀なるが如し。

但し、我國の女性、此の問題に注意するヿの淺きにはあらざる也。女性は本來此問題に對して冷淡なるヿ能はざる者なり。男子が天下國家の問題に對して、皆な下手ながらにも多少の見識を具ふる如く、女性は是非とも兒童に對して幾分の觀察を蓄はへ居るなり。男兒が紙鳶をあげて遊び廻り、已れが子供なるヿを知ると同時に、世の子供と云ふものに全たく無頓着なると同じ年頃に、女兒はすでに人形を愛することを初じめ

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

殆んど自己が子供たるとを知らざるが如し。女性は、幼けなくして既に兒童研究の天品を存す、彼等豈に此の問題に冷淡なるものならんや。

左れば、我國方今の兒童研究に、女性の觀察の現われずして、獨り男子の意見のみの多き所以のものは、人先づ女性の觀察を重んぜざるによる、其の觀察の乏しきにはあらざる也。左れば、今の男性研究者たるもの、直ちに一々兒童を手掛けて、數と、冷眼と、物數奇とに偏し易き其の研究方にのみ僻するとなく、亦た先づ女性に問ふて、彼等が兒童に於ける觀察の如何なるかを觀察すべし。自から聞くものは狹く、自から見るものは乏し、堯舜八耳を開いて天下に聞く所以のものは、人の聞く所ろに聞かんとすれば也。もし今の兒童研究者、將に將たるの雅量を懐いて、天下、有學無學の婦人等が如何に兒童に對して觀察しつゝあるかを問はば、惟ふに今の兒童研究の方針一變して、其の所得も亦た一段の進歩を奏せんかな。

女學に對して文部近日の二訓令

文部省の當局者は、女子の敎育法に關して、近頃、左の二つの訓令を發したり、

一　高等女學校に於ける學業試驗は、定期之を施さず、隨時成績によりて檢定する事。

二　女生月々生理上の變化ある時節、運動躰操の學科は休業せしむる事。

是は眞とに當然の注意ながら、今更ら初めて此の訓令の出るを見るは、二個の時勢を表證す。一つは、當局者が女子敎育に於ける實地の經驗漸よ細目に入り、自から女性の機微を覺るとの漸やく深きに至りしとを證す。二つは、今の女生倘ほ集合競學の勢ほひに慣れず、定期試驗をして有害無益たるに了らしむべき未發達性情の倘盛んなるとを證す。左れば、女學初めて起らんとする方今の時節には、斯る變則の取扱ひも要るとなれ、他日速かに其弊を脫し、男生同樣の扱かひを受けらるべき樣とこそ願ふべき譯なれ。今にして、此の注意ありしは、少しく遲きに過ぐ、然しながら、いつ迄も此を以て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學の常と做すとなかれ。
又、月華の期節を思ひて、運動の休課を許すは、男と女生特有の扱かひにて、此は是れいつ迄も其心得あるべきとながら、扨て其の許可の方式に至つては如何にすべき。尋常の病氣届にては都合悪しかるべし、他の學科に出でゝ、獨り體育をのみ休まんとする場合なれば、管理者別に一種の取締を要す、彼女をして事更らなる届出に其はづかしみを重からしむる勿れ。

戀愛教科書

有美

編者云く、有美君の此論、奇警に似て反つて當然、能く言ひがたきを喝破す。通讀し去つて點頭せざるもの少なからん。則はち故さらに當欄内に收む。

人食はざるべからず、人戀せざるべからず。食はざれば死し、戀せざれば遂に人生を解し難し。如何にして食ふべきかは、今の才子よく之を知る。されど如何にして戀すべきかに至りては、之れを覺れるもの甚だ尠し。之をしも曉天の星の如し

といふ、それ可ならんか。小學の兒童は「イロハニホヘト」を學び、四角帽いかめしき大學の學生閣下等は、「分類」の「批判」のと固くるしき事に其貴き腦髓を疲らせ給ふ。而して勉むるところ何物ぞ。食はんがためなり、一片にても多く、甘き肉を味はんがためなり。蛔虫の如き人は、互に騒ぎあひ、揉み合ひていふ、『我れは志を立てんとす』と。然れども、志を立つるとの、鹿爪らしき言ひ草も、又美はしく花々しく食はんとすとの意に外ならざるに非ずや。難有く情切なる兩親は、その恐ろしき兩の眥をつりあげながら、勿躰らしく其子女を教へていふ、『そんなことでは乞食になるぞ』と。しかも食らふ能はざる乞食の分際の、此くも厭ふべきものたるを知りて、戀する能はざる男女の、如何に淺ましく玉の杯底なきが如くなるを覺らず。愚といはんや、將た痴と稱せんや。「職」を得しむるとは「食」を得しむることなり。大工の小僧、幼にして師匠のうちに弟子入し、鋸を挽く術を教へらるゝも、是れ實は、箸を取るの術を敎へらるゝなり。又修身書と稱ふる功德あらたかなるものありて、怠惰を責め勤勉を賞揚すれども、必ずしも怠惰の悪く勤勉の美はしきが故に非ずして、

惰け怠るもの丶、遂に食らふの道なくして、行倒れとなることの不愍さを思ひ憐めばなるべし。然るに、何とて今の修身書は、戀に處すべき工夫と方略とを敎へ示さゞるか、最もよく之れに當り、最もよく之れに利すべき道を說かざるか。人は學ばざれば自ら食らふ能はず、豈に學ばずして能く戀するの理あらんや。況んやこれに成効することをや。故に以爲らく、戀するの道を敎ふること、猶ほ「職」即ち「食」を得、所謂志を立つるに至るの道を敎ふる如くならざるべからずと。これ輕々事に非ず、一笑のことに非ず、戀は人生の大事にして、人界奥義の門を闢くべき不可思議の鍵なるを。

是に至りて、戀愛敎科書の必用起る。なほ嚴めしき修身書の必用なるが如し。流石に歐米はバイロン、ゲーテの祖國たる名に反かず、小學校用敎科書のうちにすら、處々に戀愛に關はる丶詩歌美文を挿み、幼年の時より人に戀愛敎育を施すこと、恰もかの智育躰育を施すが如くにするなり。中學以上の文學敎本の如きに至りては、殆んど悉く戀ならざるなく愛ならざるはなしといふも、敢て過言に非ざらん。シエークスピヤの院本は素より戀の物語りにて、最も嚴格峻靈にしてピユウリタン思想を抱會するものなりと稱せらる丶ミルトンの『失樂園』すら、なほ且つ戀愛の趣味を加藥するなり。然るに、戀を觀ること惡魔の如く、戀すると盜むとは、其罪恰も相等しきもの丶如く心得居る我邦現時の敎育家は、些かも戀愛の趣味を敎科書のうちに加ふるを許さず。たま／＼舶載文學書のうちに、この事を說くものあれば、直に以て不義姦通を敎ふる非倫破德の書の如くに見做し、昨夜宿場女郎に接吻せし唇を眞面目らしく皆な動かして曰く、彼の書には「細君論」あり「割愛の記」あり、敎科書にふさはしからずと、少しく情愛に關する文字あれば、悉く之を削除し、所謂拔萃なるものを作りて、得々先見の明あるを誇るもの丶如し。此くして我邦中小學校の敎科書は、無味乾燥にして、何の趣味なく情愛なく、之れによりて戀愛敎育を受けしめんとするが如き、到底望むべからず。之を讀むは、誠に砂を嚙むなり。聞く狼の乳によりて養はれたるものは、その性狼の如く、犬の乳によりて養はれたるものは、その性又犬の如しと。我邦の如く、砂と石ころとの如き敎科書によりて養はる丶ものは、勢ひ砂と石ころとの性ある人物たらざるべからず。忠孝も博物智識

も、もし戀愛の洗禮を受くることなくんば、殆んど意義なき無意味のものなり。宜なる哉、小學兒童の『楠正成は人にて作り忠義を敎ふるものなり』といふことや。また某の生徒は或る作文のうちに『母は女にして父に打たるゝために生れしものなり』とさへいひしとかや。是れ皆な大忠臣大孝子の敎育家が、非常なる熱心を以て編める砂敎科書石ころ敎科書の賜ものなり。故に以爲らく、戀愛敎科書なかるべからずと。我れを以て觀るに、淨瑠璃義太夫本は、頗るこの書たるに適するものなり。されば、かの近松、出雲、紀音など諸大家著作のうちに就て、情緒痛切にして、戀愛敎育に効驗著しき部分を拔きあつめ、以て一編にあみ、之れを戀愛敎科書と題して、今の中小學に用ひしめば、今日の時弊を救ふにそれ庶幾乎。嗚呼戀せざる男女は共に人情に疎く、事理を會するに遲鈍にして、遂に共に談ずるに足らざるものたるを。

涅槃とは滅度と云ふ、無爲と云ふ、安樂と云ふ、常樂と云ふ、實相と云ふ、法身と云ふ、法性と云ふ、眞如と云ふ、一如と云ふ、佛性と云ふ、佛性即ち如來なり。

雜録

海舟先生高話 （拾海舟餘波 禁轉載）

廿九年四月一日海舟先生を訪問せし時、先生は腦病にて臥蓐中、頭を枕にされたるまゝ「御免なさい、頭が悪るいので」の一語を冒頭に、談話は早くも例の過去談に入り、近代英雄の人物評を試みられしが、此時は小生が初めて先生に面會したる時に候が、平常故伯に接し候節いつも思出すは伯の談鋒往々黒田如水に似たるとに有之候。（關如來）

佐久間象山。彼れはあれ丈の男で、隨分輕卒のちよこ〱した男だつたが。時勢に驅られたからでもあろう。

高杉晋作。年は若し、時が時だつたから、充分器量を出さずにしまつたが、なか〱活氣の强かつた男サ。

渡邊華山。温順な男で、何も彼も能く出來た人だつた。

高野長英。前の二人からは、ずつと人物は下るが、蘭書が能く讀めたので、人が器械に使つたヨ。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

吉田松陰。マヅメな人だつた。漢書は讀めたし、武士道は心得て居たし、なか〳〵エラ物だつた。品川さんは無闇と推服してるが、其筈サ。併し品川も味噌をつけたヂ。餘まり人間が正直すぎて、咎がないものだから。

長州では、殺された連中になか〳〵人物があつたよ。周布政之助、永井雅樂、などみんな人に知られずに殺されてしまつたが、惜しい人達サ、今じやァ伊藤さんが一番ゑらかろう、生きて居るからヂー。

薩州では、西鄕と大久保。土州では坂本と岩崎彌太郎。熊本では、横井と元田だろう。坂本は己を殺しに來た奴だがなか〳〵人物サ——其時己は笑つて受けてたがヂ——沈着いて何となく犯しがたい威嚴があつて、能い男だつたヨ。

元田永孚。は温良恭儉讓の人で、横井は反對に亂暴な人だつた。併し年老つてから彼様いふ風に變て、今じやァ横井〳〵と人がいふ様になつたが、若い時はカラしかたがなかつた。

水戸の景山。を烈公〳〵と敬まつて人がいふが、耳が遠くて、なか〳〵の傑人物サ。西山公を學んで學び損ねたのだヂ。烈公よりは慶喜公の方が餘程人物だヨ。

水戸の出來で朝比奈や役人の者等が烈公では、いかぬと云つて、各藩の様に幕府の子孫を貰つて繼嗣にしやうと思つたのを、藤田や何かゞ、それはさせぬと一揆を起して、とう〳〵勝つたから正黨といはれ、朝比奈や其他は敗れたから奸黨と呼はれるのも、皆成敗によつて論ずるので、何が何だか解つたものかヂ。幕府の子孫を繼嗣とするのに何がわるい。皆各藩でして居るじやないか。

まるで、あの時の事は今の朝鮮サ。水戸の烈公は朝鮮の大院君と少しも變りはしない。ノー。エ。幕末でも私が一人で捌きをつけたから善かつたが、御覧よ、一つ遣損なへば、やはり今の朝鮮見た様になつて仕舞ふのサ。ノー。

これより話頭一轉忽ち徃時の俳諧戯作者の人物評に入る

徃時の戯作者で私の知つて居るのは、そうさね、先づ種彥、京傳、馬琴の三人サ。

京傳。は左る大名の落胤で、一生親知らずに、京橋傳馬町の藥種問屋に育つたものだと、傳へるのだが、其實とうだか。才は卓絶れてゐたし、氣量は博くて、詢に大家におうやうに育てられた息子だつたそうだ。

種彥。は極くの通人で、頭なぞも幇間風に結つて、面白い人物だつたヨ。人間が圓いと云つても、あの位角のとれた男も少なかろう。

馬琴。は偏人で、見上げる程大きな男サ。幼少の時分、根岸肥前守の小性を勤て居たが、其頃からなか〳〵ひどい男だつた。肥前守が始終人の談話を書き留めて置いた『耳袋』といふものがあつて、これは決して人に見せなかつたのだが、緣者の兒島春庵といふのが、是非に『耳袋』を拜見したいといふので、馬琴を使に持せて遣つた。ナンのまだ十三の幼童だから、肥前守も油斷をして居ると、馬琴は途々之を讀んだものと見えて、是から十年程經つて京傳の家に食客をして居る時、彼の『耳袋』の中に書いてあつた事を殘らず綴つて世間に出して仕舞つた。それで肥前守は勿論兒島春庵も非常に驚いて、馬琴程ひどい男はない、あれ程根氣のある、記臆力の強い人はない、必ず一方の豪傑となるだろうと、云つて居たそうで、兒島は始終私に其事を話して居つた。

それに馬琴は學問も博くて、支那小說を能く讀んだものだから、趣向が實に旨かつた。平常決して人に遇はぬ男で、

いつも書齋に閉籠つて矻々書いて居た。馬琴程大作を出した男はまづ前後になかろうが、えらい男サ。

それにあの頃の人は大抵貧乏で、士になるといつても金がなくてはなることが出來ない所から、皆憤を戲作に晴らして居たので、なか〳〵開けたものサ。何にでも通じて居て、互に惡くいふなぞの事はせず、會があれば何處へでも出るし。人が來れば面白く話をして聞かせる。——併し馬琴丈は偏人だつたが——今の人の樣に、それ何が流行るから彼を仕やう、此が起りさうだから、之に掛ろうなぞと、時世に追はれもしないで、優然自重して、自ら守れる道を踏んで往た所なぞは感心な者だ。

この人達とは、ずつと下つて、春水、三馬、一九など、とんな連中が大分あつたが、皆下卑て居たヨ。私は武藝一方で、あんまり斯ういふ風の男とは交際はなかつたが、それでも今の小說家なんぞよりは、ずつと器量は博く、氣前も大きかつたろうヨ。

翁はこれにて暫らく話をとゞめ、やをら枕邊なる黒塗の長煙管を手にして一服燻らしながら、さて言葉

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を改めて
世は淺ましいものさねー、今まで話した人達は、私が二十五六才の頃から交際つたのだが、七十四才の今日となつて見れば、みんな、死んで仕舞つて、一人も殘つてやしない。思へば實に果敢ないものさ。

鑛毒文學

鑛毒被害慘狀の悲歌

田中正造（寄）

悟毒海居士

抑渡良瀨水源は、遠く流れを足尾より、關八州の沃野をば、貫き渡りて六十里、機業に名高き桐生町、足利佐野に舘林、其他沿岸村々は、皆此河の賜ものぞ、頃は明治の三四年、渡良瀨川の水源に、採鑛業のありしより晝猶暗き足尾山、野火煙毒と濫伐に、雨露堪る力なく、降る雨毎の洪水は、岩石崩れ砂流れ、かてゝ加えて流毒は、渡良瀨川をかき濁し、其害いとゞ著るく、魚介の類は云ふもさら、沿岸田畑は害されて、芝蘆竹や木の根迄、枯れて堤も岸もかけ、今は河身も荒れ果てゝ、少しく水嵩増す時は、兩岸堤はかけ破れ、見渡す限の良田は、皆毒波に浸されて、家屋人畜流亡し、田畑に一穗の稔りなく家に喰ふの粟もなく、見るも哀れの枯野原、嗚呼我々の祖先こそ、皆渡良瀨の賜ものに、斯も賑ひたるものを、斯も尊き渡良瀨川、濁り濁りて今は將た、人の躰も毒に染み、姙めるものは、流産し、育む乳は不足なし、二つ三つ迄育つるも、毒の障に皆殪され、又惡疫も流行し、悲慘の數は限なく、時の政府へ嘆願も、惡人蟲に遮きられ、九年の長き其間、今に清めぬ渡瀨川、時の政府へ嘆願も、費用に今はつかれ果て親子は非命に殪されて、今に清めぬ渡瀨川、親子は非命に殪さるゝ、早く清めよ渡瀨川、時の政府は何故に斯も我等を虐ぐる、嗚呼我々は身の爲と、人の爲には死も恐じず、嗚呼我々は土地のため、國の爲には死も恐じず、嗚呼我々は憲法を、守る爲には死も恐じず、時の政府は何故に、斯も我等を虐たぐる、早く清めよ渡瀨川、清めて死人の處置をせよ、清めて我等を殺すなよ、清めて我等を殺すなよ、嗚呼我々は　皇帝の、愛し賜はる國民ぞ、早く清めよ渡瀨川、早く清めよ渡瀨川
慈悲と德義と義俠とを原とする我か四千萬の同胞よ我々を憐みたまへ救ひたまへ

○犬の種類

犬の種類澤山あり。(一)土地の犬、(二)ぶら付き犬、(三)賣せ行商の犬、(四)村中滯在の犬、(五)直接人民に傷ける犬、(六)間接離間策の犬、(七)人の怖れるはなしする犬、(八)人を威して怖れさせる犬、(九)青年を誹りて運動させぬ犬、(十)其父母をだます犬、(十一)被害地見物のさき激甚地を見せぬ工風する犬、(十二)貧乏をすゝめて仇敵きの市兵衛の處へ物買に行く犬、等いろ〳〵、澤山あります。正義の士は此の犬に食われ噛まれる勿れ。

○今回の入獄者

今回の入獄者は、三十余萬人民の爲め、國家の御年貢地を保護する忠臣義士なり、神樣なり。而して、此世話をなし、救の道を盡して免れる者は、慈善家なり、志士なり、仁人なり。第二第三之請願を用意する者は、神の心なり。此神の心を堅くし、堅く強くするは、彌々神の心に叶ふものなり。神はもさより、罪なきものは、天地の間に怖るゝ者なし。我々の心は、即ち神の心に叶ふものなり。罪若し此請願に邪間をなし、暴行をなす者は、常に國法を蹂躙して、國家を亡滅せしむる魔境妖怪物たる市兵衛の犬なり。之れに頓着せずして、我々は第二の請願を急ぐべし。

○殺さばお殺しなさい

殺さば御殺しなさい、我々被害地十二ヶ村中の三十四字の内のみで、最早一千〇六十四人は、毒のために殺されしぞ。之れは、昨年十二月五日迄の調である。之れより昨年二月迄の毒死者の調は、其時内務大臣にも、農商務大臣にも、疾くにさし出してありしぞ。又昨年帝國議會は、我々を憐みて、救つてやれさの議決をなせしぞ。本年も、又貴族院にては、我々の請願を採用せしぞ。衆議院も、鑛毒の厚薄調査會を、政府に促かせしぞ。然を今以て我々を救ふへき處分を爲さゞるぞ。我々は、毒に殺さるゝの外ないぞ。殺さは、殺せ、腕力で擊は、うて、傷けるなら、傷けよ。我々の身體は、我々の身體にあらず。我々は　天皇陛下の臣民なるために、我々は被害地よりも多年間納稅の義務を盡したるぞ、我々ハ、　天皇陛下の臣民なるために、毒に惱みつゝも、于今兵役の義務を怠らぬぞ。我々の身は、我々の身にあらず、國家の義務を負へる、全き責任ある　陛下の臣民なるぞ。我々の身體に傷くるものは、即ち國家に傷くると同一なるぞ。　陛下の臣民に傷るものなるぞ。然れども、國に災害あり、時に妖怪あり、古河市兵衛なるもの、國家重貴の良士さ、人民を滅するを憚からずして、我々を殺し、國土を亡せり。故に此惡事を働くの張は、皆市兵衛の飼犬なるぞ。恰も市兵衛の犬が、　陛下の臣民を噬み殺すの道理なり。政府なければ、我々を殺せ、法律なければ我々を殺せ、今や政府ありさせは、殺さるゝものゝために、其仇打の請願は止めぬぞ。政府ありさせは、我々は、此死人のために、此請願は止まさるぞ。例へ、政府なしさするも、我々は、此死人のために、被害地同胞のために、被害の厚薄なく、國士のために其實を守るために、此人殺しを退治して、此被害慘狀より來る苦痛をさくるための運動は、止まさるぞ。我々は、未た　陛下あり法律あるがために、國土臣民自身を守るために、其請願は止まさるぞ。第二第三は、もさよりあらん限りの請願を爲して、殺さば殺せ、我々を殺すは、國家を殺すものなるぞ、故に我々の同胞に告く。

○諸役場に願ふ

近來東京よりの通信書は屢々なり。百も二百も何もかも御承知の御方々には、必用もなきものなれども、先年來村々鑛毒事情の運び一切の成行きを、我々下々に通信すべき方法なく、下々のもの、鑛毒の事情に通ぜず、今日に至りても、事件の道理にくらきもの多きために、加害者にひどい目にのみ逢へつゝ、生命を奪はれたるほさなり。又常々市兵衛の犬にも侮さられ、馬鹿にもされ、たゝかれ、傷けられ、其上にさぎなからすさされたる今日の不幸に至りたるわけなり。但し、町々村々役場の諸君、及職員諸君なぞは、皆御れき〳〵なれば、屢々の通信無必用と思召さるゝ方も多かるべくも、此時節柄は、別段に、下々にも事情を知らせ度、將來は必ず村々下々にて通信の道開き度、其郵便税を省かんさせば、町村役場の御手數を願ふの便利によらざるを得ず、何卒東京は勿論、何事にても、可成廣く速に御配賦方御指圖下され、其下々に至る迄、通信書送中滯りなき樣に、又村々の通信者にて握りつぶしのなき樣に、御命し下々迄行屆候樣厚く御注意奉願候謹言。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○生死の羈絆

「我に自由を與えよ、否らざれば死を與えよ」と叫びつる當年の憤慨は、人の屢ば傳唱する所なれど、此の自由未だ全たく自由とするに足らず、心地何をもつて自如自在の活氣を得んや。死を希がふと、亦た同じ、遂に安息の自由ならんや。人もし死を與えよと希がひて而して得可らずんば、自由を與えよと希がひて而も得ざると、其の煩惱は相ひとし、將た何の差別かある。曩には民權の士、偏えに自由を要求して、其心益々自由に遠ざかる、寧ろ求めざるもの丶自由自主たるに若かざりしなり。死を祈るもの亦然り、汝もし眞とに死せんとを欲せば、其の欲すべき心志を殺し、先づ自から煩悶を滅するに及かず、則はち死せしものと相等しからん也。嗚呼、人の迷ひや、生死の羈絆に縛せらる丶より甚しきはなし。生死もと我を縛するとなきなり、我則はち自から縛す、必竟、煩悩に過ぎざるのみ。我元と自から生きしにあらず、我遂に自から死するにあらず、生死本來一場の現象、唯だ我が經過する當面の風景たるに過ぎざるなり。敢て生きんとを欲するの愚かさは、殊更に死を急がんとする愚に相似たり。死は急ぐべきものにあらず、亦た怖るべきものにもあらず。其の來るは、老年の來るが如く、晩景の近づくが如く、木の葉の落るが如く、元と當然なるが故に即はち自然なるとを知り、敢て作爲故造して心志を勞するには及ばざると也。夫れ、生死の羈絆、念頭より脱離し、存亡有無の異別を忘れて、只だ在の儘に活如躍如たれば、心地朗々として常に樂しく、自主自由として何の故障もなし。古人歌ひて曰く、芳野山、花さく頃のあさな〳〵、心にかゝる峯の白雪。

○さとりの生命

身躰健全なるものは身躰あるとを忘る、之に掛念するの初は病の初めなり、病むと甚はだしく、痛むと烈しくして、之に掛念すると彌よ切なり。身躰健全なれば、一身五躰、和して反かず、百官千脈、調のひて亂れず、正に一氣一精に成る、

即はち生命あるの謂ひなり。心裏本念の調不調亦た之に似たり。たとひ情緒の纏綿たるものありとも能く一貫し、思考錯雜、數たゞび複合すとも能く統一せば、健全なりし教法士、之を信と云ふ、信あれば即にち一和して生命あればなり　悟道士、之を悟りと云ふ、悟れば即はち一徹して障礙あらざればなり。道徳家、之を至誠と云ふ、誠なれば即はち一氣にして雜ざる所なければなり。夫れ、天下、帝王一にして則はち正しく、治、行届きて紛塵なし。人心の能く治まりて雜塵累らず、煩惱亦た悦服して悟樂に入るは、心裏の一國妙に主宰の下に安んずるの狀、正に是れ大丈夫能く心中を掃平するの故なり。懷疑は是れ尾大振はざるもの、空理に泥むは、居留地を置くにひとし。王化の沾はざるを王の恥とせば、吾が心情の一化せざるは、我恥に非ずや。人よ、山中の賊を平らぐるに先だちて、心中の賊を討て。身外の事業に急ぐに先だちて、念頭の建設に力めよ　徒らに、空拳を揮つて大地を打つ、喩えば、無より有を生せんとするが如し。嗚呼、今の所謂ゆる事業なるものは、其根抵あるものにあらず、何に據りて堅く立ち、何に倚つて久しく維持せんさする乎。

○「氣」と云へる文字

大凡そ、今ま其の意義明白ならざるに、甚はだ廣ろく使用せらるゝ言語あらば、こは初め深厚なる意義を含みて、有力なる人に發言せられ、甚はだ廣ろく流行したる名殘ぞと知れ。試みに、「氣」の一字を見よ。其の用いらるゝことの如何に廣くして、其意義の如何に模糊たるや。左れど、仔細に、其の含畜する所を嚙味して、此字本來の旨意を考ふれば、其の義玄妙にして、其味はひ盡きがたし。先づ、左の數句に見よ。

氣性。氣合。氣魂。元氣。氣味。氣に入る。氣貧し。

人氣。拔氣。氣運。氣脈。天氣。氣候。空氣。氣癖。

誰か能く明瞭に其意義を解釋するものぞ。惟ふに、修養の士、合點頓悟するの外あらざるべし。

○花の佳人

問に、さまぐ\の花の色かな。汝皆な自得して滿足せりや。其の裝ほひは、自からせし乎、與えられし乎。飾らんとする乎、媚んとする乎。他の見つゝありと思へるや、たゞ自から

獨々樂しめる乎。左るにても、紅き白き互ひに妍まず、香ひあると無きと、相隣して犯さず、各自季節に隨がひて操を變えざる、美くしき哉。花よ、汝は、何處より來る。其のむくつけき枝よりか、其の味ひなき泥よりか、而も馥郁たる香りと、艶麗なる色とは、殊に其の何ものより得たる。嗚呼、天か、天なり。天の此の佳人を與へたるを謝す。

○花の友、花の涙

復た春に會ひて樂しくはあれど、一年の過しとも迅速なるかな。此のひとゝせは何に用いしやと回顧すれば、今はたゞ心に驚ろかるゝとのみなり。左るにても、花は年々開き、人は歳々眺めつゝあり。歳々之を眺めて、樹は長じ、人は老ゆ。落花、地に消え、人影、月夜に鮮やかなり。ことしは是れ花月相會するの運、近年稀にありて心太はだ樂しく、半夜、樹下にそゞろありきして、つく／＼と思ふ。花あるは天の惠、花に樂しむは、わが天質なれど、恨亦長く、思殊に切まれるを奈何んせん。嗚呼、花は吾友にして、亦吾涙なり。片々たる落葩、乞ふ暫らく枝頭に留まつて待てよ。

寄書

ゆめの夜

すゞ虫

きのふ市の學校より三日間の休暇を得て家に歸へりたゝ妾は今宵姉よりもやさしくなつかしき友の露子の君を訪ひ參らさむものをと下男に送られながら心靜に清らかなる月の光を浴びし露を命の虫の音しげき野路をたどりゆきしに見渡す限りの景色いさゝあはれ深くあさは知らさる戀の胸に湧きければ今朝の徒然に讀み覺えし野宮の一と節

野の宮の月も昔や思ふらん影さびしくも森の下露身の置きどころもあはれ昔の庭のたゝずまひよそにぞ變はる氣色も假なる小柴垣露うちはらひ訪はれし我も其人も唯ゆめの世となりゆく跡なるにたれ松虫の音はりん／＼として風茫々たる野の宮の夜すがらなつかしやさ

口の中にてくり返へす事數回荒涼の秋氣に打たれて心神殆ど氷の如くなり茫さして我吾を忘るゝ中にいつしか露子の君が家近く來たれは嬉れしさに胸先つ躍りて此處より下男をかへしやり妾一人庭へ入れは月は淅しき影を水に映して築山の木蔭に鐵燈籠の光佗ひしけなるに見れは霜にも露にも異變はらぬ松の根方に結ひし竹の網代の腰垣より横に見せたる丸窓はたしかに露子の君が居るなるにぞ日頃の親しさにそと驚かさんものと窓の下近かく身をよせは障子に寫つる燈火かすかに内は靜閑にして音もなし只時にすきまもれて心細くも立迷ふ香煙一縷折々聞ゆる吐息のみ主が消息を務して今までの樂しみと悅ひさに充たされし我心をば驚かしぬ

あまりのいふかしさに聲出ださん氣力も失せて恐る／＼室内に入れは獨り机に打もたれ首を俯して物思はし氣なる露子の君のいと歎き玉へる樣にて振かへりなから

此夜寒むに何んさ・て來給ひたるぞお一人にてか學校は如何にしてさ悦ひ玉へる言葉の中にもはや用談の濁もにはたしかに露の玉ぬけるな姿は何故さは知らねども必ずや深き憂ひの父も沸きいてたるならんさ思へば言葉短かに今胃辱はやらせ・始末を語・けれは燈火の影に背きて君白き顏に涕しゝ笑みを含み玉へる君は

いつに變はらぬやさしさ梅子さまの御心根のうれしさに又しても我身の愚痴なおきかせ申事のつらけれども月こそ變はれ今日は二十一日まことに但に恨めしく懷かしく忘れかたきは二十一日親には見はれなには妻ゐらぬ今の此身の上に・・・野末の小屋にも降らぬ涙の雨に打たれて言ひ甲斐はれの忘れかたさに更け行く夜半の燈火かゝげて閉り書な讀む心の底を知る人さては梅子さま貴嬢の外には御座りませぬ

返へらぬ愚痴さは思ひますれども秀夫樣の御存命ならは今頃はさぞても浮き世の味氣なさに春の花にも秋の月にも脆き涙の一生なこゝろして聞かれ給らしますも思へは此世の義理にせめられて身を有髪尼の思ひ出を破りましたる罰に御座りませう

凝く涙に眞ばれか諦めてゐくまで世を果敢なみ玉へる言葉に友も流るゝ涙な袂にしぼりし果ては無言の中に塡へる何限の苦悶を漸やく胸に鎮めて

何事も定まりし因縁さおきらめなされて御身の御保養なさるゝこそ・・・・さ云へは無言のまゝ首肯きし玉の若き人の一の手箱より一通の手紙取り出だして

梅子さま是はこの秀夫樣か其の日の生花には未來の嫁さ心にむびまするお二人樣の御手跡な夫樣お亡くなり遊ばされし後親しき人のお話にて御養子もお迎ひなされお嫁樣さへ極まりしさ聞きましたに薄命の人には何處までも不運の影の添ひますものか其養子は不圖した心の迷ひから今は家名も殘り少なに惑ひ果たし知己親類よりは不義理の借財さへ山の如く積みましたる苦しさにお嫁樣お一人な跡に殘して何處さもなく姿な隱くしましたる由　十にもあまるお祝いおさびしきさへ親類はあるさ申ても此末方くれさなさゝ事さて思ひ忍まするの夜ひ行に手なに心を碎きますれさ思ふにまかせぬは世の習な何不足なき此家に嫁ぎて居りまする身のせめてはお嫁樣の御身にかゝる急場の恩義だけも妾の力にさは思ひますれさ是にても自にもあまる大金の事て御座りますれは其人の手前・・・・梅子さま立つ波荒き大海の下にも人知らぬ眞珠の光はあり外には見えぬ木蔭にも情けの露は宿りますさか聞きましたか・・・勿躰なき事ながら其人に露ばかりもやさしき同情の涙かありましたならば嘸や嬉しき事でありませうさ・・・

姿かせつなき心の中御推量下さりませ

情に厚く涙もろき梅子の君か胸を絞ばりてのなげきに是を聞く妾か胸は麻の如く亂れ去りては來り往きてはかへる不斷の妄想只此世の無情にして頼み少なきを思へは筆に一言も盡されぬ無量の感に打たれし果ては其場にも居堪へかたくなりて窓押し開けはやゝ傾きし月影を追ふて浮き盪る大空を渡る雁か音哀れに風に散る木の葉の二ッ三ッ。

新刊書

○西郷隆盛傳

我に易へ實に拔きて流石かは張齋氏の精確なる校正を經て、材料閑雅な豊富なから可、結構軽蕩の書き流しにあらず。此の卷、伏見鳥羽の戰、江戶城受取の二段の如き、共に西郷先生一代の偉観なるのみならず、其の詳事も亦蒼表に出でゝ從來、人の知らざりし逸話も多く集められたり。

○晋其角

岡野知十氏が俳諧を談ずるは、自己の薬籠中に物を探るが如し、自由自在なり。今の俳壇を把せしには子規なれども、之をして普く知らしめしは知十君なり。今ま其年を以て、其角を記し、文章洗論、精妙尤とも可なり。終に、晋子發句評を附録す、これ珍書の一なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

（本書儀出版以來非常の好評を得て忽ち三版も賣切れさ相成今回訂正第四版を發行致し特別に女服改頁袴足袋股引腹掛脚作等裁縫方詳細圖解一覽表を添ゆ　正價金五拾錢

天下無二　内務省版權登録證第一七五三號　東京有名裁縫師野口金三郎著

和服裁縫口傳書　全

特別大割引金四拾錢　郵税四錢

●爲替は取手郵券代用二割増し

本書は袴羽織被布東コート振袖留袖三枚着ひよく其外何品に限らず苟も和服の裁縫に係る事は一切洩さず積り方縫方等數百種を如何なる初心の人にも極めて解し易き樣圖解を入れ恰も手を取て教ると同樣に記載せり與服業には尤も大利益あり又御婦人方には大便利なる良書なり

附録　義太夫肩衣御祭り立附新形古形女合羽子供合羽等裁方縫方詳細の圖解一覽表

洋服裁縫法　フロックコート、ヅボン、シヤツチョッキ、裁方詳細圖解書

◉發行所

茨城縣北相馬郡取手町

●和服裁縫術速成教授專門　野口裁縫教授所

青柳有美著

戀愛文學

四月下旬發賣

（附録）美術論數篇　裸體畫其他美的寫眞版入

●戀愛と婦人の眞相を知らんとする人は讀め

◉男に詐されたりと思ふ女は讀め

●女に欺かれたりと思ふ男は讀め

●戀に悩めるものも又讀め

●此書は魔書なり不健全なり不道德なり

●此書は世を騷がさんとする青柳有美の處女作なり

發行所　春陽堂

社長　松島剛

英語通信講學

卅三年四月開講●初等一ヶ月廿五錢●中等全三十錢●高等全卅五錢●入社金五拾錢

本社ハ今回事業ヲ擴張シ雜誌ノ外各專門大家ノ手ニ成レル國語、漢文、地理、歷史、博物、經濟、數學、工學、農業等ノ完備セル講義録ヲ漸次發行ス（四月ヨリ先ヅ英語ヲ開講ス）本社ノ講義録ハ各科ヲ雜駁ニ陳列セズ、もうろん等歐米最近ノ教授法ニ據リ初步ヨリ順次正則ニ教授シ各等講義録ヲ別册トシ隨意ノ等級ニ入リ自宅獨修セシム講師顧問學科等詳細ノ規則書ハ二錢郵券ニテ送ル

東京青山南町三丁目五十三番地

學窓餘談社通信講學部

故若松賤子女史譯述

再販

小公子

全一册洋裝美本　紙數三百五十頁　正價金三十五錢　郵税八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるると數十百回、一代の流行を左右して、一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしさ云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化す、德に隣あり、母に依人あり、貧しきを憐み、小作人を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し。讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるるを覺ゆ、何ぞ其の可憐純潔なるや。少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史嚮に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に嘖傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものさし、激賞措かず、嘗て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に卷を掩ふ能はざりしさ云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるると切なり。即ち爰に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、郷友松井昇氏は挿繪を附せり、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京巣鴨村庚申塚　女學雜誌社

明治三十二年五月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY